総人口は18万3千人の減少、減少幅は前年より大きく拡大

平成21年10月1日現在の我が国の総人口は1億2751万人で、20年10月から21年9月までの1年間に18万3千人（0.14％）減少した。人口増減は、これまで増加幅が縮小傾向で推移し、平成17年に戦後初めて前年を下回った後、18年、19年とほぼ横ばいとなっていたが、20年には7万9千人の減少となり、21年は18万3千人の減少と、減少幅が前年より大きく拡大した。

日本人人口は1億2582万人で、前年に比べ12万7千人（0.10％）減少し、5年連続の減少となった。この5年間の減少幅をみると、平成17年から19年までの3年間に比べ、20年と21年はほぼ倍となっている。

（表1、図1、表2）
注）人口増減率は、前年10月から当年9月までの人口増減数を前年人口（期首人口）で除したもの。
注1）統計年17年の増減数には補間補正数（統計12年国勢調査人口を基に算出した推計人口と、17年国勢調査人口との差を各年に均等配分して算出したもの）を含む。
2）前年10月から同年9月までの増減数を前年人口（期首にかわる人口=期首人口）で除したもの。
3）国勢調査人口。日本人人口は、総人口に対する日本人人口の割合で、不詳分を含まない。

図１ 総人口の人口増減数及び人口増減率の推移（昭和25年～平成21年）
男性は5年連続の減少、女性は2年連続の減少

男女別にみると、男性は6213万人（総人口の48.7%）で、前年に比べ12万1千人（0.20%）減少、女性は6538万人（同51.3%）で6万1千人（0.09%）減少となり、男性は5年連続、女性は2年連続の減少となった。

人口性比（女性100人に対する男性の数）は95.0となっており、女性が男性より325万人多くなっている。

### 表3 男女別人口の推移（平成7年～21年）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年次</th>
<th>10月1日現在人口</th>
<th>総増減1)</th>
<th>自然増減</th>
<th>社会増減</th>
<th>総増減2)</th>
<th>自然増減</th>
<th>社会増減</th>
<th>総増減3)</th>
<th>自然増減</th>
<th>社会増減</th>
<th>総増減4)</th>
<th>自然増減</th>
<th>社会増減</th>
<th>男性</th>
<th>女性</th>
<th>人口性比</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>平成7年</td>
<td>61,574</td>
<td>128</td>
<td>0.21</td>
<td>123</td>
<td>-25</td>
<td>63,996</td>
<td>177</td>
<td>0.28</td>
<td>174</td>
<td>-25</td>
<td>28</td>
<td>96.2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>61,698</td>
<td>124</td>
<td>0.20</td>
<td>129</td>
<td>-16</td>
<td>64,161</td>
<td>165</td>
<td>0.26</td>
<td>178</td>
<td>3</td>
<td>-16</td>
<td>96.2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>61,827</td>
<td>129</td>
<td>0.21</td>
<td>118</td>
<td>0</td>
<td>64,329</td>
<td>168</td>
<td>0.26</td>
<td>170</td>
<td>14</td>
<td>-16</td>
<td>96.1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>61,952</td>
<td>125</td>
<td>0.20</td>
<td>113</td>
<td>0</td>
<td>64,520</td>
<td>190</td>
<td>0.30</td>
<td>169</td>
<td>38</td>
<td>-16</td>
<td>96.0</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>62,077</td>
<td>65</td>
<td>0.10</td>
<td>77</td>
<td>-24</td>
<td>64,650</td>
<td>130</td>
<td>0.29</td>
<td>135</td>
<td>11</td>
<td>-16</td>
<td>95.9</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>62,111</td>
<td>94</td>
<td>0.15</td>
<td>85</td>
<td>-5</td>
<td>64,815</td>
<td>165</td>
<td>0.26</td>
<td>141</td>
<td>40</td>
<td>-16</td>
<td>95.8</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>62,265</td>
<td>155</td>
<td>0.25</td>
<td>81</td>
<td>52</td>
<td>65,051</td>
<td>236</td>
<td>0.36</td>
<td>138</td>
<td>94</td>
<td>4</td>
<td>95.7</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>62,395</td>
<td>30</td>
<td>0.05</td>
<td>69</td>
<td>-60</td>
<td>65,190</td>
<td>140</td>
<td>0.21</td>
<td>126</td>
<td>10</td>
<td>4</td>
<td>95.6</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>62,368</td>
<td>73</td>
<td>0.12</td>
<td>28</td>
<td>23</td>
<td>65,326</td>
<td>136</td>
<td>0.21</td>
<td>87</td>
<td>45</td>
<td>4</td>
<td>95.5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>62,380</td>
<td>12</td>
<td>0.02</td>
<td>22</td>
<td>-31</td>
<td>65,407</td>
<td>80</td>
<td>0.12</td>
<td>81</td>
<td>-5</td>
<td>4</td>
<td>95.4</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>62,349</td>
<td>-31</td>
<td>-0.05</td>
<td>25</td>
<td>-28</td>
<td>65,419</td>
<td>12</td>
<td>0.02</td>
<td>34</td>
<td>-25</td>
<td>4</td>
<td>95.3</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>62,330</td>
<td>-19</td>
<td>-0.03</td>
<td>26</td>
<td>7</td>
<td>65,440</td>
<td>21</td>
<td>0.03</td>
<td>26</td>
<td>-6</td>
<td>4</td>
<td>95.2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>62,310</td>
<td>-20</td>
<td>-0.03</td>
<td>26</td>
<td>6</td>
<td>65,461</td>
<td>21</td>
<td>0.03</td>
<td>23</td>
<td>-2</td>
<td>4</td>
<td>95.2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>62,251</td>
<td>-59</td>
<td>-0.09</td>
<td>41</td>
<td>-18</td>
<td>65,441</td>
<td>20</td>
<td>-0.03</td>
<td>7</td>
<td>-27</td>
<td>4</td>
<td>95.1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>62,130</td>
<td>-121</td>
<td>-0.20</td>
<td>54</td>
<td>-67</td>
<td>65,380</td>
<td>-61</td>
<td>-0.09</td>
<td>-56</td>
<td>-57</td>
<td>4</td>
<td>95.0</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注1) 前年10月から当年9月までの増減数。
注2) 前年10月から当年9月までの増減数を前年人口（期首人口）で除したもの。
注3) 国勢調査人口を基に算出した推計人口と、その次の国勢調査人口との差を各年に均等配分して算出したもの。
注4) 国勢調査人口。
男性は5年連続の自然減少、女性は初の自然減少

自然増減（出生児数－死亡者数）をみると、出生児数は、第2次ベビーブーム期（昭和46年～49年）以降は減少傾向が続いており、平成21年には108万7千人で前年に比べ2万1千人の減少となった。一方、死亡者数は、114万6千人で前年に比べ4千人の増加となった。

この結果、出生児数が死亡者数を5万9千人下回って、3年連続の自然減少となり、減少幅は拡大している。男女別にみると、男性は5年連続の自然減少、女性は比較可能な昭和25年以来、初めて自然減少となっている。[(表2、表3、図2、図3)]

外国人は平成6年以来15年ぶりの社会減少、過去最大の減少幅

社会増減（入国者数－出国者数）をみると、入国者数は311万4千人で前年に比べ2万5千人の増加、出国者数は323万7千人で前年に比べ32万9千人の増加となった。

この結果、入国者数が出国者数を12万4千人下回り、比較可能な昭和25年以来、初めて10万人を超える社会減少となった。男女別にみると、男性は2年連続の減少、女性は6年連続の社会減少となっている。

これを日本人・外国人の別にみると、日本人は7万7千人の社会減少、外国人は4万7千人の社会減少となった。外国人は平成6年以来15年ぶりに社会減少に転じており、過去最大の減少幅となっている。[(表2、表3、図2)]

図2 要因別人口増減数の推移（昭和60年～平成21年）

図3 男女別出生児数及び死亡者数の推移（昭和45年～平成21年）

注1）「人口動態統計」（厚生労働省）による。
2）「出入口管理統計」（法務省）による。平成17年までの日本人については、海外滞在90日以内の入国者数、出国者数を含めている。
表4 元号別人口及び割合

<table>
<thead>
<tr>
<th>平成21年</th>
<th>平成20年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>10月1日現在人口</td>
<td>総人口に占める割合(%)</td>
</tr>
<tr>
<td>明治生まれ</td>
<td>166</td>
</tr>
<tr>
<td>大正生まれ</td>
<td>5,190</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和生まれ</td>
<td>98,115</td>
</tr>
<tr>
<td>平成生まれ</td>
<td>24,039</td>
</tr>
<tr>
<td>戦後生まれ</td>
<td>97,255</td>
</tr>
</tbody>
</table>

また、戦後生まれの人口は9725万5千人（総人口の76.3%）となった。

65歳以上人口は増加が続き、総人口の22.7%。

年齢3区分別にみると、年少人口（0～14歳）は1701万1千人で前年に比べ16万5千人の減少、生産年齢人口（15～64歳）は8149万3千人で80万6千人の減少となっているのに対し、老年人口（65歳以上）は2900万5千人で78万9千人の増加となっている。なお、75歳以上人口は1371万人で49万1千人の増加となっている。

図4 我が国の人口ピラミッド（平成21年10月1日現在）
総人口に占める割合をみると、年少人口が13.3％、生産年齢人口が63.9％、老年人口が22.7％で、前年に比べ、年少人口、生産年齢人口がそれぞれ0.2ポイント、0.6ポイント低下し、老年人口が0.6ポイント上昇している。なお、75歳以上人口は10.8％で0.4ポイント上昇している。

総人口に占める割合の推移をみると、年少人口は、昭和50年（24.3％）以降一貫して低下を続け、平成21年（13.3％）は過去最低となっている。生産年齢人口は、昭和57年（67.5％）以降上昇していたが、平成4年（69.8％）をピークに、その後は低下を続けている。一方、老年人口は、昭和25年（4.9％）以降上昇が続いており、平成21年（22.7％）は過去最高となっている。なお、75歳以上人口は上昇を続け、平成21年は10.8％となっている。

(図5, 表5)

<table>
<thead>
<tr>
<th>年次</th>
<th>総人口（千人）</th>
<th>年少人口</th>
<th>生産年齢人口</th>
<th>老年 人口</th>
<th>年少人口</th>
<th>生産年齢人口</th>
<th>老年 人口</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>(0~14歳)</td>
<td>(15~64歳)</td>
<td>75歳以上</td>
<td>(0~14歳)</td>
<td>(15~64歳)</td>
<td>75歳以上</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和25年</td>
<td>83,200</td>
<td>29,430</td>
<td>49,661</td>
<td>4,109</td>
<td>1,057</td>
<td>35.4</td>
<td>59.7</td>
</tr>
<tr>
<td>30</td>
<td>89,276</td>
<td>29,798</td>
<td>54,730</td>
<td>4,747</td>
<td>1,388</td>
<td>33.4</td>
<td>61.3</td>
</tr>
<tr>
<td>35</td>
<td>93,419</td>
<td>28,067</td>
<td>60,002</td>
<td>5,350</td>
<td>1,626</td>
<td>30.0</td>
<td>64.2</td>
</tr>
<tr>
<td>40</td>
<td>98,275</td>
<td>25,166</td>
<td>66,928</td>
<td>6,181</td>
<td>1,874</td>
<td>25.6</td>
<td>68.1</td>
</tr>
<tr>
<td>45</td>
<td>103,720</td>
<td>24,823</td>
<td>71,566</td>
<td>5,350</td>
<td>2,213</td>
<td>23.9</td>
<td>69.0</td>
</tr>
<tr>
<td>50</td>
<td>111,940</td>
<td>27,322</td>
<td>75,839</td>
<td>8,869</td>
<td>2,842</td>
<td>24.3</td>
<td>67.7</td>
</tr>
<tr>
<td>55</td>
<td>117,060</td>
<td>27,524</td>
<td>78,884</td>
<td>10,653</td>
<td>3,661</td>
<td>23.5</td>
<td>67.4</td>
</tr>
<tr>
<td>60</td>
<td>121,049</td>
<td>26,042</td>
<td>82,380</td>
<td>12,472</td>
<td>4,713</td>
<td>21.5</td>
<td>68.2</td>
</tr>
<tr>
<td>平成2年</td>
<td>123,611</td>
<td>22,544</td>
<td>86,140</td>
<td>14,928</td>
<td>5,986</td>
<td>18.2</td>
<td>69.7</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>125,570</td>
<td>20,033</td>
<td>87,260</td>
<td>18,277</td>
<td>7,175</td>
<td>16.0</td>
<td>69.5</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>126,926</td>
<td>18,505</td>
<td>86,380</td>
<td>22,941</td>
<td>9,012</td>
<td>14.6</td>
<td>68.1</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>127,316</td>
<td>18,283</td>
<td>86,139</td>
<td>22,869</td>
<td>9,532</td>
<td>14.4</td>
<td>67.7</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>127,486</td>
<td>18,102</td>
<td>85,706</td>
<td>23,628</td>
<td>10,043</td>
<td>14.2</td>
<td>67.3</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>127,694</td>
<td>17,905</td>
<td>85,404</td>
<td>24,311</td>
<td>10,547</td>
<td>14.0</td>
<td>66.9</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>127,787</td>
<td>17,734</td>
<td>85,077</td>
<td>24,876</td>
<td>11,067</td>
<td>13.9</td>
<td>66.6</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>127,768</td>
<td>17,585</td>
<td>84,422</td>
<td>25,761</td>
<td>11,639</td>
<td>13.8</td>
<td>66.1</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>127,770</td>
<td>17,435</td>
<td>83,731</td>
<td>26,604</td>
<td>12,166</td>
<td>13.6</td>
<td>65.5</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>127,771</td>
<td>17,293</td>
<td>83,015</td>
<td>27,464</td>
<td>12,703</td>
<td>13.5</td>
<td>65.0</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>127,692</td>
<td>17,176</td>
<td>82,300</td>
<td>28,216</td>
<td>13,218</td>
<td>13.5</td>
<td>64.5</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>127,510</td>
<td>17,011</td>
<td>81,493</td>
<td>29,005</td>
<td>13,710</td>
<td>13.3</td>
<td>63.9</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注) 各年10月1日現在。昭和25年～平成12年及び17年は国勢調査人口（年齢不詳をあん分した人口）による。
昭和45年までは沖縄県を含まない。
我が国の人口の年齢構造を各国と比べてみると、調査年次に相違はあるものの、比較的ドイツやイタリアに近くている。しかし、我が国の年少人口割合はドイツ、イタリアより、それぞれ0.3ポイント、0.7ポイント低く、各国の中で最も低くなっている。一方、老年人口割合はドイツ、イタリアより、それぞれ2.3ポイント、2.6ポイント高く、各国の中で最も高くなっている。

参考表1 各国の年齢3区分別人口の割合及び年齢構造指数

<table>
<thead>
<tr>
<th>国名</th>
<th>推計時点</th>
<th>総数 (千人)</th>
<th>0~14歳人口割合 (%)</th>
<th>15~64歳人口割合 (%)</th>
<th>65歳以上人口割合 (%)</th>
<th>年少人口指数</th>
<th>生産年齢人口指数</th>
<th>老年人口指数</th>
<th>年皆化指数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>中国</td>
<td>2009.12.31</td>
<td>1,334,740</td>
<td>25.3</td>
<td>63.9</td>
<td>45.9</td>
<td>11.6</td>
<td>36.9</td>
<td>45.9</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>インド</td>
<td>2001.3.1</td>
<td>1,028,610</td>
<td>59.3</td>
<td>67.3</td>
<td>13.5</td>
<td>8.0</td>
<td>67.3</td>
<td>13.5</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>アメリカ合衆国</td>
<td>2009.11.1</td>
<td>307,831</td>
<td>29.9</td>
<td>19.4</td>
<td>49.3</td>
<td>64.8</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>インドネシア</td>
<td>2007.7.1</td>
<td>225,642</td>
<td>40.8</td>
<td>7.5</td>
<td>48.3</td>
<td>18.4</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ブラジル</td>
<td>2007.7.1</td>
<td>187,642</td>
<td>40.3</td>
<td>9.6</td>
<td>49.8</td>
<td>23.8</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>バキスタン</td>
<td>2007.7.1</td>
<td>149,860</td>
<td>75.5</td>
<td>6.0</td>
<td>81.5</td>
<td>7.9</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ロシア</td>
<td>2008.1.1</td>
<td>142,909</td>
<td>20.5</td>
<td>19.3</td>
<td>39.8</td>
<td>94.1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ベンガルデシュ</td>
<td>2004.7.1</td>
<td>136,700</td>
<td>64.6</td>
<td>6.7</td>
<td>71.3</td>
<td>10.4</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>日本</td>
<td>2009.10.1</td>
<td>127,510</td>
<td>20.9</td>
<td>35.6</td>
<td>56.5</td>
<td>170.5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ナイジェリア</td>
<td>2003.7.1</td>
<td>126,153</td>
<td>83.4</td>
<td>5.1</td>
<td>88.5</td>
<td>6.1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>メキシコ</td>
<td>2005.7.1</td>
<td>105,791</td>
<td>46.5</td>
<td>8.5</td>
<td>55.0</td>
<td>18.2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>フィリピン</td>
<td>2008.12.31</td>
<td>82,002</td>
<td>54.6</td>
<td>7.2</td>
<td>61.7</td>
<td>13.1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ドイツ</td>
<td>2009.12.31</td>
<td>72,561</td>
<td>20.4</td>
<td>20.4</td>
<td>51.5</td>
<td>150.2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>エチオピア</td>
<td>2007.5.28</td>
<td>73,919</td>
<td>86.8</td>
<td>6.1</td>
<td>92.8</td>
<td>7.0</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>トルコ</td>
<td>2009.12.31</td>
<td>72,561</td>
<td>38.8</td>
<td>10.5</td>
<td>49.2</td>
<td>27.0</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>イラン</td>
<td>2006.10.28</td>
<td>70,496</td>
<td>36.0</td>
<td>7.4</td>
<td>43.4</td>
<td>20.7</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>タイ</td>
<td>2007.7.1</td>
<td>66,042</td>
<td>31.1</td>
<td>10.4</td>
<td>41.5</td>
<td>33.3</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>エジプト</td>
<td>2000.7.1</td>
<td>63,976</td>
<td>63.9</td>
<td>5.8</td>
<td>69.7</td>
<td>9.0</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>フランス</td>
<td>2010.1.1</td>
<td>62,793</td>
<td>28.3</td>
<td>26.0</td>
<td>54.2</td>
<td>91.8</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>イギリス</td>
<td>2008.7.1</td>
<td>61,383</td>
<td>26.4</td>
<td>24.4</td>
<td>50.8</td>
<td>92.3</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>タイ</td>
<td>2009.1.1</td>
<td>60,045</td>
<td>21.3</td>
<td>30.6</td>
<td>51.9</td>
<td>143.4</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ビクトリア</td>
<td>2004.7.1</td>
<td>54,299</td>
<td>52.8</td>
<td>8.9</td>
<td>61.6</td>
<td>16.8</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>南アフリカ</td>
<td>2009.7.1</td>
<td>49,321</td>
<td>49.3</td>
<td>7.7</td>
<td>57.0</td>
<td>15.5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>韓国</td>
<td>2009.7.1</td>
<td>48,747</td>
<td>23.1</td>
<td>14.7</td>
<td>37.8</td>
<td>63.5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>スイス</td>
<td>2010.1.1</td>
<td>45,989</td>
<td>21.9</td>
<td>24.7</td>
<td>46.6</td>
<td>112.7</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ウクライナ</td>
<td>2008.12.31</td>
<td>45,963</td>
<td>20.1</td>
<td>22.7</td>
<td>42.9</td>
<td>113.0</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>コロンビア</td>
<td>2007.7.1</td>
<td>43,926</td>
<td>47.3</td>
<td>10.0</td>
<td>57.2</td>
<td>21.1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注1) 推計時点が2000年以降で人口4000万以上の国とした。
注2) 各国統計機関のホームページによる。
注3) 国連人口統計年鑑（2007年版）による。

4) $\frac{0\sim14\text{歳人口}}{15\sim64\text{歳人口}} \times 100$
5) $\frac{65\text{歳以上人口}}{15\sim64\text{歳人口}} \times 100$
6) $\frac{0\sim14\text{歳人口}+65\text{歳以上人口}}{15\sim64\text{歳人口}} \times 100$
7) $\frac{65\text{歳以上人口}}{0\sim14\text{歳人口}} \times 100$
## 都道府県別人口

１ 人口の動向

### 東京都が全国人口の10.1%を占める

平成21年10月1日現在の都道府県別の人口は、東京都が1286万8千人と最も多く、次いで神奈川県（894万3千人）、大阪府（880万1千人）、愛知県（741万8千人）、埼玉県（713万人）となっており、以下、人口600万人台が1県、500万人台が3道県、300万人台が1県、200万人台が10府県、100万人台が19県、100万人未満が8県となっている。人口順位を前年と比べると、滋賀県と奈良県、沖縄県と青森県がそれぞれ入れ替わった。

全国に占める割合をみると、東京都が10.1%と最も高く、全国人口の1割を占めている。なお、全国に占める割合が5%以上の5都府県で全国人口の35.4%を、4%以上の9都道府県で52.9%を占めており、前年に比べ、それぞれ0.1ポイント上昇している。

### 表6 都道府県別人口及び全国人口に占める割合
（各年10月1日現在）

<table>
<thead>
<tr>
<th>順位</th>
<th>都道府県</th>
<th>人口（千人）</th>
<th>平成21年</th>
<th>全国に占める割合（%）</th>
<th>順位</th>
<th>都道府県</th>
<th>人口（千人）</th>
<th>平成20年</th>
<th>全国に占める割合（%）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>東京都</td>
<td>12,868</td>
<td>12,838</td>
<td>12.1</td>
<td>25</td>
<td>山口県</td>
<td>1,455</td>
<td>1,463</td>
<td>10.1</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>神奈川県</td>
<td>8,943</td>
<td>8,917</td>
<td>7.1</td>
<td>26</td>
<td>奈良県</td>
<td>1,436</td>
<td>1,444</td>
<td>10.1</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>大阪府</td>
<td>8,801</td>
<td>8,806</td>
<td>6.9</td>
<td>27</td>
<td>長崎県</td>
<td>1,430</td>
<td>1,440</td>
<td>10.1</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>愛知県</td>
<td>7,418</td>
<td>7,403</td>
<td>5.8</td>
<td>28</td>
<td>滋賀県</td>
<td>1,405</td>
<td>1,402</td>
<td>9.9</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>建玉県</td>
<td>7,130</td>
<td>7,113</td>
<td>5.6</td>
<td>29</td>
<td>奈良県</td>
<td>1,399</td>
<td>1,404</td>
<td>9.9</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>千葉県</td>
<td>6,139</td>
<td>6,122</td>
<td>4.8</td>
<td>30</td>
<td>沖縄県</td>
<td>1,382</td>
<td>1,376</td>
<td>9.2</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>兵庫県</td>
<td>5,853</td>
<td>5,856</td>
<td>4.4</td>
<td>31</td>
<td>青森県</td>
<td>1,379</td>
<td>1,392</td>
<td>9.0</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>北海道</td>
<td>5,507</td>
<td>5,355</td>
<td>4.3</td>
<td>32</td>
<td>岩手県</td>
<td>1,340</td>
<td>1,352</td>
<td>9.0</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>福岡県</td>
<td>5,053</td>
<td>5,054</td>
<td>4.0</td>
<td>33</td>
<td>大分県</td>
<td>1,195</td>
<td>1,200</td>
<td>8.9</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>静岡県</td>
<td>3,792</td>
<td>3,800</td>
<td>3.9</td>
<td>34</td>
<td>山形県</td>
<td>1,179</td>
<td>1,188</td>
<td>8.8</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>滋賀県</td>
<td>2,960</td>
<td>2,964</td>
<td>2.3</td>
<td>35</td>
<td>石川県</td>
<td>1,165</td>
<td>1,168</td>
<td>8.9</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>広島県</td>
<td>2,863</td>
<td>2,869</td>
<td>2.2</td>
<td>36</td>
<td>宮崎県</td>
<td>1,132</td>
<td>1,136</td>
<td>8.9</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>京都府</td>
<td>2,622</td>
<td>2,629</td>
<td>2.1</td>
<td>37</td>
<td>秋田県</td>
<td>1,096</td>
<td>1,108</td>
<td>8.9</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>新潟県</td>
<td>2,378</td>
<td>2,391</td>
<td>1.9</td>
<td>38</td>
<td>富山県</td>
<td>1,095</td>
<td>1,101</td>
<td>8.9</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>宮城県</td>
<td>2,336</td>
<td>2,340</td>
<td>1.8</td>
<td>39</td>
<td>和歌山県</td>
<td>1,004</td>
<td>1,012</td>
<td>8.8</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>本州県</td>
<td>2,159</td>
<td>2,171</td>
<td>1.7</td>
<td>40</td>
<td>香川県</td>
<td>999</td>
<td>1,003</td>
<td>8.8</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>岐阜県</td>
<td>2,092</td>
<td>2,100</td>
<td>1.6</td>
<td>41</td>
<td>山梨県</td>
<td>867</td>
<td>871</td>
<td>8.7</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>福島県</td>
<td>2,040</td>
<td>2,052</td>
<td>1.6</td>
<td>42</td>
<td>佐賀県</td>
<td>852</td>
<td>856</td>
<td>8.7</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>群馬県</td>
<td>2,007</td>
<td>2,012</td>
<td>1.6</td>
<td>43</td>
<td>福井県</td>
<td>808</td>
<td>812</td>
<td>8.6</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>奈良県</td>
<td>2,006</td>
<td>2,011</td>
<td>1.6</td>
<td>44</td>
<td>徳島県</td>
<td>789</td>
<td>794</td>
<td>8.6</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>岐阜県</td>
<td>1,942</td>
<td>1,948</td>
<td>1.5</td>
<td>45</td>
<td>高知県</td>
<td>766</td>
<td>773</td>
<td>8.6</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>三重県</td>
<td>1,870</td>
<td>1,875</td>
<td>1.5</td>
<td>46</td>
<td>島根県</td>
<td>718</td>
<td>725</td>
<td>8.6</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>熊本県</td>
<td>1,814</td>
<td>1,821</td>
<td>1.4</td>
<td>47</td>
<td>鳥取県</td>
<td>591</td>
<td>595</td>
<td>8.5</td>
</tr>
</tbody>
</table>
人口増減率は都道府県別にみると、沖縄県が0.45%と最も高く、次いで神奈川県が0.29%、千葉県が0.28%、埼玉県が0.24%、東京都が0.23%などとなっている。7都県で増加している。一方、秋田県（-1.10%）、青森県（-0.94%）、島根県（-0.93%）など40府県で減少している。

人口が増加している7都県のうち5都県は、自然増加・社会増加となっている。愛知県及び沖縄県では自然増加・社会減少となっている。また、前年に比べ、増加率が上昇したのは沖縄県のみとなっており、6都県は低下している。

人口が減少している40府県のうち38府県は、自然減少・社会減少となっている。大阪府及び福岡県では自然増加・社会減少となっている。また、前年に比べ、18府県では減少率が上昇しており、2府県は同率、20道県は低下している。

図6 都道府県別人口増減率

表7 都道府県別人口増減率 (単位 %)

<table>
<thead>
<tr>
<th>都道府県</th>
<th>人口増減率</th>
<th>都道府県</th>
<th>人口増減率</th>
<th>都道府県</th>
<th>人口増減率</th>
<th>都道府県</th>
<th>人口増減率</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 沖縄県</td>
<td>0.45</td>
<td>17 岡山県</td>
<td>-0.30</td>
<td>31 富山県</td>
<td>-0.54</td>
<td>37 福島県</td>
<td>-0.62</td>
</tr>
<tr>
<td>2 神奈川県</td>
<td>0.29</td>
<td>18 埼玉県</td>
<td>-0.30</td>
<td>32 福井県</td>
<td>-0.57</td>
<td>38 鹿児島県</td>
<td>-0.57</td>
</tr>
<tr>
<td>3 千葉県</td>
<td>0.28</td>
<td>19 三重県</td>
<td>-0.30</td>
<td>33 愛媛県</td>
<td>-0.57</td>
<td>39 和歌山県</td>
<td>-0.70</td>
</tr>
<tr>
<td>4 埼玉県</td>
<td>0.24</td>
<td>20 奈良県</td>
<td>-0.34</td>
<td>34 福井県</td>
<td>-0.57</td>
<td>40 長崎県</td>
<td>-0.70</td>
</tr>
<tr>
<td>5 東京都</td>
<td>0.23</td>
<td>21 岡山県</td>
<td>-0.34</td>
<td>35 山口県</td>
<td>-0.57</td>
<td>41 鳥取県</td>
<td>-0.70</td>
</tr>
<tr>
<td>6 滋賀県</td>
<td>0.22</td>
<td>22 香川県</td>
<td>-0.34</td>
<td>36 大分県</td>
<td>-0.62</td>
<td>42 山形県</td>
<td>-0.70</td>
</tr>
<tr>
<td>7 愛知県</td>
<td>0.19</td>
<td>23 熊本県</td>
<td>-0.40</td>
<td>37 徳島県</td>
<td>-0.62</td>
<td>43 静岡県</td>
<td>-0.70</td>
</tr>
<tr>
<td>8 福岡県</td>
<td>-0.02</td>
<td>24 岐阜県</td>
<td>-0.41</td>
<td>38 鳥取県</td>
<td>-0.62</td>
<td>44 高知県</td>
<td>-0.90</td>
</tr>
<tr>
<td>9 大阪府</td>
<td>-0.06</td>
<td>25 岐阜県</td>
<td>-0.41</td>
<td>39 独立県</td>
<td>-0.90</td>
<td>45 福岡県</td>
<td>-0.90</td>
</tr>
<tr>
<td>10 兵庫県</td>
<td>-0.06</td>
<td>26 山梨県</td>
<td>-0.43</td>
<td>40 長崎県</td>
<td>-0.90</td>
<td>46 静岡県</td>
<td>-0.90</td>
</tr>
<tr>
<td>11 栃木県</td>
<td>-0.12</td>
<td>27 佐賀県</td>
<td>-0.44</td>
<td>41 北海道</td>
<td>-1.04</td>
<td>47 秋田県</td>
<td>-1.10</td>
</tr>
<tr>
<td>12 松阪県</td>
<td>-0.20</td>
<td>28 大分県</td>
<td>-0.46</td>
<td>42 新潟県</td>
<td>-1.10</td>
<td>48 北海道</td>
<td>-1.10</td>
</tr>
<tr>
<td>13 北海道</td>
<td>-0.20</td>
<td>29 北海道</td>
<td>-0.52</td>
<td>43 長崎県</td>
<td>-1.10</td>
<td>49 北海道</td>
<td>-1.10</td>
</tr>
<tr>
<td>14 静岡県</td>
<td>-0.21</td>
<td>30 長野県</td>
<td>-0.53</td>
<td>50 北海道</td>
<td>-1.10</td>
<td>51 北海道</td>
<td>-1.10</td>
</tr>
<tr>
<td>15 群馬県</td>
<td>-0.26</td>
<td>31 新潟県</td>
<td>-0.54</td>
<td>52 北海道</td>
<td>-1.10</td>
<td>53 北海道</td>
<td>-1.10</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）人口増減率（%） = \frac{人口増減（前年10月～当年9月）}{前年10月1日現在人口} × 100

人口増減 = 自然増加 + 社会増加
表8 人口増減要因別都道府県

<table>
<thead>
<tr>
<th>増減要因</th>
<th>都道府県名</th>
<th>都道府県数 (平成21年)</th>
<th>都道府県数 (平成20年)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>人口増加</td>
<td>自然増加・社会増加 埼玉県 千葉県 東京都 神奈川県 滋賀県</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>自然増加・社会減少 愛知県 沖縄県</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>自然減少・社会増加</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>人口減少</td>
<td>自然増加・社会減少 大阪府 福岡県</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>自然減少・社会減少</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>自然減少・社会減少 北海道 青森県 岩手県 宫城県 秋田県 山形県 福島県 茨城県栃木県 群馬県 新潟県 富山県 石川県 福井県 長野県 岐阜県 静岡県 三重県 京都府 兵庫県 奈良県 和歌山県 鳥取県島根県 島根県 広島県 山口県 徳島県 香川県 愛媛県 高知県佐賀県 長崎県 熊本県 大分県 宮崎県 鹿児島県</td>
<td>38</td>
<td>37</td>
</tr>
</tbody>
</table>
### 9都府県で自然増加

自然増減を都道府県別にみると、増加が9都府県、減少が38道府県となっている。

自然増加率は、沖縄県が0.50%と最も高く、次いで愛知県が0.21%、神奈川県が0.17%、滋賀県が0.16%、埼玉県が0.11%などとなっている。増加した9都府県のうち、7県では前年に比べ増加率が低下しており、千葉県は同率、東京都は上昇している。

一方、自然減少率は、秋田県が0.63%と最も高く、次いで高知県が0.51%、島根県が0.45%、青森県及び山形県が0.42%などとなっている。減少した38道府県のうち、9道府県では減少率が上昇しており、6県は同率、鳥取県、広島県及び徳島県は低下している。

なお、自然増減率は、沖縄県が平成2年に1％を下回り0.91%となって以来、すべての都道府県で1％を下回っており、7年以降は沖縄県を除く46都道府県で0.5%を下回っている。

表9 都道府県別人口の自然増減率

<table>
<thead>
<tr>
<th>自然増減率順位</th>
<th>都道府県</th>
<th>自然増減率</th>
<th>都道府県</th>
<th>自然増減率</th>
<th>都道府県</th>
<th>自然増減率</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>全国</td>
<td>-0.05</td>
<td>-0.03</td>
<td>北海道</td>
<td>-0.09</td>
<td>-0.05</td>
<td>長崎県</td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>沖縄県</td>
<td>0.50</td>
<td>16</td>
<td>岐阜県</td>
<td>0.09</td>
<td>-0.05</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>愛知県</td>
<td>0.21</td>
<td>18</td>
<td>奈良県</td>
<td>-0.10</td>
<td>-0.10</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>神奈川県</td>
<td>0.17</td>
<td>19</td>
<td>茨城県</td>
<td>-0.11</td>
<td>-0.07</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>滋賀県</td>
<td>0.16</td>
<td>19</td>
<td>石川県</td>
<td>-0.11</td>
<td>-0.05</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>埼玉県</td>
<td>0.11</td>
<td>21</td>
<td>群馬県</td>
<td>-0.12</td>
<td>-0.07</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>千葉県</td>
<td>0.09</td>
<td>21</td>
<td>福井県</td>
<td>-0.12</td>
<td>-0.12</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>東京都</td>
<td>0.08</td>
<td>23</td>
<td>岡山県</td>
<td>-0.13</td>
<td>-0.10</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>福岡県</td>
<td>0.03</td>
<td>23</td>
<td>熊本県</td>
<td>-0.13</td>
<td>-0.13</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>大阪府</td>
<td>0.02</td>
<td>25</td>
<td>佐賀県</td>
<td>-0.15</td>
<td>-0.14</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>兵庫県</td>
<td>-0.02</td>
<td>26</td>
<td>宮崎県</td>
<td>-0.17</td>
<td>-0.12</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>静岡県</td>
<td>-0.04</td>
<td>27</td>
<td>大分県</td>
<td>-0.21</td>
<td>-0.19</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>広島県</td>
<td>-0.04</td>
<td>28</td>
<td>山梨県</td>
<td>-0.22</td>
<td>-0.19</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>鳥取県</td>
<td>-0.07</td>
<td>28</td>
<td>長野県</td>
<td>-0.22</td>
<td>-0.18</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>滋賀県</td>
<td>-0.07</td>
<td>30</td>
<td>北海道</td>
<td>-0.23</td>
<td>-0.21</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注) 自然増減率(%) = \( \frac{自然増減(前年10月〜当年9月)}{前年10月1日現在人口} \) × 100

自然増減 = 出生児数 - 死亡者数

図8 都道府県別人口の自然増減率
社会増減を都道府県別にみると、増加が5都県、減少が42道府県となっている。社会増加率は、千葉県が0.19％と最も高く、次いで東京都が0.15％、埼玉県が0.13％、神奈川県が0.12％、滋賀県が0.06％となっている。増加した5都県はすべて、前年に比べ増加率が低下している。
一方、社会減少率は、青森県が0.52％と最も高く、次いで鳥取県が0.49％、秋田県、島根県及び長崎県が0.48％などとなっている。減少した42道府県のうち、15県では減少率が上昇しており、24道府県は低下、兵庫県は同率、愛知県及び三重県は増加から減少に転じた。

表10 都道府県別人口の社会増減率

<table>
<thead>
<tr>
<th>都道府県</th>
<th>社会増減率順位</th>
<th>社会増減率</th>
<th>都道府県</th>
<th>社会増減率順位</th>
<th>社会増減率</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>平成21年</td>
<td>平成20年</td>
<td></td>
<td>平成21年</td>
<td>平成20年</td>
</tr>
<tr>
<td>-</td>
<td>-0.10</td>
<td>-0.03</td>
<td>16 広島県</td>
<td>-0.16</td>
<td>-0.10</td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>千葉県</td>
<td>0.19</td>
<td>17 静岡県</td>
<td>-0.17</td>
<td>-0.00</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>東京都</td>
<td>0.15</td>
<td>18 梅木県</td>
<td>-0.19</td>
<td>-0.09</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>埼玉県</td>
<td>0.13</td>
<td>19 京都府</td>
<td>-0.19</td>
<td>-0.20</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>神奈川県</td>
<td>0.12</td>
<td>20 三重県</td>
<td>-0.19</td>
<td>-0.35</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>滋賀県</td>
<td>0.06</td>
<td>21 山口県</td>
<td>-0.19</td>
<td>-0.51</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>群馬県</td>
<td>0.02</td>
<td>22 山梨県</td>
<td>-0.21</td>
<td>-0.13</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>石川県</td>
<td>0.02</td>
<td>23 静岡県</td>
<td>-0.24</td>
<td>-0.35</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>兵庫県</td>
<td>0.04</td>
<td>24 大分県</td>
<td>-0.24</td>
<td>-0.65</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>奈良県</td>
<td>0.05</td>
<td>25 三重県</td>
<td>-0.24</td>
<td>-0.44</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>大阪府</td>
<td>0.08</td>
<td>26 福岡県</td>
<td>-0.25</td>
<td>-0.30</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>宮城県</td>
<td>0.12</td>
<td>27 新潟県</td>
<td>-0.26</td>
<td>-0.16</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>香川県</td>
<td>0.12</td>
<td>28 富山県</td>
<td>-0.26</td>
<td>-0.37</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>兵庫県</td>
<td>0.14</td>
<td>29 愛媛県</td>
<td>-0.26</td>
<td>-0.37</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>群馬県</td>
<td>0.14</td>
<td>30 徳島県</td>
<td>-0.27</td>
<td>-0.42</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）社会増減率（％） = 社会増減（前年10月～同年9月） × 100
前年10月1日現在人口

図9 都道府県別人口の社会増減率

- 11 -
2 年齢別人口
すべての都道府県で生産年齢人口割合が低下し, 老年人口割合が上昇

年齢3区分別的人口の割合を都道府県別にみると, 年少人口（0～14歳）の割合は沖縄県が17.7%と最も高く, 次いで滋賀県が15.0%, 愛知県が14.6%, 福井県及び佐賀県が14.2%などとなっている。一方, 秋田県が11.2%と最も低く, 次いで東京都が11.9%, 北海道が12.0%, 高知県が12.1%, 青森県, 山形県及び徳島県が12.5%などとなっている。年少人口の割合は総じて低下傾向にあり, 前年に比べ京都のみ上昇, 4府県で同率, その他の42府県で低下している。

表11 都道府県, 年齢3区分別人口の割合（各年10月1日現在）（単位：%）
生産年齢人口（15〜64歳）の割合は、東京都が67.3%と最も高く、次いで神奈川県が66.6%、埼玉県が66.4%、千葉県が65.7%、愛知県が65.5%などとなっている。一方、島根県が58.2%と最も低く、次いで高知県が59.5%、鹿児島県が59.8%、秋田県及び山口県が59.9%などとなっている。生産年齢人口の割合は、すべての都道府県で前年に比べ低下している。

老年人口（65歳以上）の割合は、島根県が29.0%と最も高く、次いで秋田県が28.9%、高知県が28.4%、山口県が27.5%、山形県が27.0%などとなっている。一方、沖縄県が17.5%と最も低く、次いで愛知県が19.8%、埼玉県及び神奈川県が20.0%、滋賀県が20.2%などとなっている。老年人口の割合は、埼玉県、千葉県及び奈良県が前年に比べ0.9ポイント上昇するなど、すべての都道府県で上昇している。なお、沖縄県を除く46都道府県で、老年人口が年少人口を上回っている。

また、75歳以上の人口の割合をみると、島根県が16.4%と最も高く、埼玉県が7.8%と最も低くなっている。なお、75歳以上人口が年少人口を上回っているのは16県となっており、前年（12県）から増加している。

<table>
<thead>
<tr>
<th>都道府県</th>
<th>75歳以上の対前年増加率（%）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>島根県</td>
<td>5.6</td>
</tr>
<tr>
<td>千葉県</td>
<td>5.4</td>
</tr>
<tr>
<td>東京都</td>
<td>4.7</td>
</tr>
<tr>
<td>神奈川県</td>
<td>4.3</td>
</tr>
<tr>
<td>新潟県</td>
<td>1.5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

75歳以上人口の対前年増加率が5%以上の5府県は、75歳以上人口割合が10%未満

老年人口（65歳以上）の対前年増加率を都道府県別にみると、埼玉県が4.9%と最も高く、次いで千葉県が4.7%、神奈川県が4.3%、愛知県及び大阪府が3.7%などとなっている。全国平均（2.8%）を上回っているのは12都府県となっている。

また、75歳以上人口の対前年増加率をみると、埼玉県が5.6%と最も高く、次いで千葉県及び神奈川県が5.4%、沖縄県が5.3%、大阪府が5.1%などとなっており、全国平均（3.7%）を見越しているのは12都府県となっている。

75歳以上人口の対前年増加率が5%以上の上位5府県は、75歳以上人口の割合が10%未満と低くなっている。

<table>
<thead>
<tr>
<th>都道府県</th>
<th>75歳以上の対前年増加率（%）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>島根県</td>
<td>5.6</td>
</tr>
<tr>
<td>千葉県</td>
<td>5.4</td>
</tr>
<tr>
<td>東京都</td>
<td>4.7</td>
</tr>
<tr>
<td>神奈川県</td>
<td>4.3</td>
</tr>
<tr>
<td>新潟県</td>
<td>1.5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）対前年増加率（%） = \[
\left( \frac{\text{当年の65（75）歳以上人口}}{\text{前年の65（75）歳以上人口}} - 1 \right) \times 100
\]
＜参考＞
都道府県別人口を3大都市圏別に合算してみると，東京圏は3508万人，名古屋圏は1137万9千人，大阪圏は1840万4千人となっており，3大都市圏の人口は6486万4千人となっている。
全国に占める割合をみると，前年に比べ東京圏は0.1ポイント上昇，名古屋圏と大阪圏はそれぞれ同率となった。3大都市圏では0.2ポイント上昇している。

参考表2 3大都市圏別人口の推移（昭和55年～平成21年）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年次</th>
<th>全国</th>
<th>3大都市圏合計</th>
<th>東京圏</th>
<th>名古屋圏</th>
<th>大阪圏</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>昭和55年</td>
<td>117,060</td>
<td>55,922</td>
<td>9,869</td>
<td>17,355</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>60</td>
<td>121,049</td>
<td>58,342</td>
<td>10,231</td>
<td>17,838</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>平成2年</td>
<td>123,611</td>
<td>60,464</td>
<td>10,550</td>
<td>18,117</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>125,570</td>
<td>61,646</td>
<td>10,810</td>
<td>18,260</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>126,926</td>
<td>62,870</td>
<td>11,008</td>
<td>18,443</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>127,316</td>
<td>63,235</td>
<td>11,064</td>
<td>18,483</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>127,486</td>
<td>63,494</td>
<td>11,064</td>
<td>18,483</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>127,694</td>
<td>63,788</td>
<td>11,144</td>
<td>18,496</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>127,787</td>
<td>64,006</td>
<td>11,183</td>
<td>18,495</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>127,768</td>
<td>64,185</td>
<td>11,229</td>
<td>18,477</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>127,770</td>
<td>64,384</td>
<td>11,286</td>
<td>18,463</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>127,771</td>
<td>64,613</td>
<td>11,340</td>
<td>18,446</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>127,692</td>
<td>64,794</td>
<td>11,379</td>
<td>18,425</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>127,510</td>
<td>64,864</td>
<td>11,379</td>
<td>18,404</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注1）次年10月1日現在。昭和55年～平成12年及び13年は国勢調査人口による。
2）東京圏  ～～  東京都，神奈川県，埼玉県，千葉県
名古屋圏  ～～  愛知県，岐阜県，三重県
大阪圏  ～～  大阪府，兵庫県，京都府，奈良県

(参考表2)